

人と学問

横山幸三

－ 1 －

平成11年度の初め、故永田康昭助教授は忽然としてこの世を去られた。文字通りの夭折と呼んでよいであろう。志半ばでの早世は、本当に惜しんでも余りある。あらゆる意味において、これからという矢先のことであった。

ご承知の通り、故永田助教授は西洋古典文学という研究分野では気鋭の少壮学者として期待されており、また大学の教育面では日本語・日本文化学類において「上級英語」や「世界文学と日本文学」の授業担当者として不可欠の存在であった。結婚間もないご家庭にあっては、愛児の成長を楽しみにされておられ、近々にも新居の建設を計画中であったと聞いている。

前途ある同僚の追悼文を書かねばならぬ切なさをひたすらに堪えて、以下、主として筑波大学との関わりのなかで、故人がどのような業績を残されたかを、経歴を紹介しながら、見てゆくことにしたい。

－ 2 －

故人は、まず京都大学文学部にて西洋古典語学文学を学び、同大学大学院文学研究科修士課程にて言語学（西洋古典語学文学）を専攻、昭和55年に筑波大学大学院文芸・言語研究科博士課程に転じ、同じく西洋古典文学を研究した。とりわけて、詩人ウェルギリウスの研究を重ね、その成果を論文『トロイア人アエネアスとローマ』（修士学位論文、昭和58年3月）にまとめた。故人の発表した処女論文は、「敦盛」のワキについて」（『文学研究論集』第一号、昭和59年）であるが、修士論文の一部は所属する西洋古典学会での口頭発表後、学会誌に収められた（『アエネイス』の「眠りの門」と物語構造』『西洋古典学研究』33号、昭和60年）。

昭和60年に筑波大学研究協力部研究協力課文部技官として任用され、「『アエネイス』第二巻におけるアエネイスの「英雄らしさ」について」（『文藝言語

研究』文藝篇第10号、昭和61年)を發表している。昭和62年には、筑波大学文芸・言語学系助手に昇任、同じ年に「アエネアスの家庭内における「孤独」の意味(上)」(『文藝言語研究』文藝篇第11号、昭和62年)を發表している。

昭和62年には、東北歯科大学講師に転じ、同大学で「非恋愛詩としてのパラクラウシテュロ—— Ov.Am.1.6」(『東北歯科大学学会誌』第15巻第4号、昭和63年)を發表している。奥羽大学と名称変更になった同大学講師を辞して、故人が再び筑波大学に戻ったのは、平成4年のことであった。現代語・現代文化学系所属の講師として、3部作「Recusatioの味方としてのマエケーナース—— Hor.C.2.12(上・中・下)」(『言語文化論集』第40-42号)を發表している。

この論考は、博士論文への礎石のひとつとして、ウェルギリウスの親友ホラティウスの詩作品を扱ったもので、作品の精密な内在的分析という従前の方法に加えて、詩人の親友・パトロンであったマエケーナースを中心に、従来看過されていた人間関係の側面に光を投げ、それが創作自体に積極的に関与している事実を独自の着想に基づいて解明した。文学・思想を専ら内在的観点より扱う近年の研究手法とは一線を画するこの視点を、故人は博士論文『ウェルギリウス研究』において大幅に援用する予定であった。

こうして、気鋭のラテン学者として斯界の囑望に応じて種々の論文を發表する傍ら、J.J.バツハオーフェン『母権論』の翻訳(みすず書房、共訳、平成5年)やI.F.ストーン『ソクラテス裁判』の翻訳(法政大学出版局、平成6年)ばかりでなく、古典作品の翻訳にも手を染め、岩波書店刊『キケロー選集』(全14巻)第10巻『善と悪の究極について』(平成11年11月予定)のみならず、『ローマ喜劇全集』におけるブラウトゥスの喜劇二点の翻訳依頼を受けていた。

平成9年5月には助教授に昇任し、学内では研究分野のみならず教育面でも大いにその活躍が期待されていた。この頃、教育に関する所感として次のように述べている。

「私は西洋古典文学、つまり古代ギリシア・ローマの文学を専門に研究してきた。そのような背景をもつ者が一般教養の英語の教育に携わることの利点は、教材を語学的にも内容的にもいわば向こう側から見て解説することに有利であるという点に求めることができるであろう。単に単語レベル、部分的な表現形式レベルにおいてのみならず、より深い層においていわば印欧語的な言語感覚、思考形式上の特長、歴史的文化的背景等の面から教材を見直し、その文脈の中に置き直し解説を加えることに有利であると思われるのである。その種の作業

はもちろんすべての英語教員が実施されていることであるが、単に日本語の側から英語あるいは英語教材のみを見る場合と比べて、それらをその母体となったヨーロッパの古典古代の側から見る、あるいはその両者を常に複眼的に見得る立場にある者のほうに利があることは論をまたないであろう。」

また、研究に関しては以下のような考えを披瀝している。

「私は西洋古典文学を専門に研究してきたが、従来は個々の作品論の枠内に視野が限定されがちであった。将来は個々の作品論、作家論の枠を超えて、また場合によっては西洋の古典古代という枠をも超えて例えば日本文学まで横断するような形で、文学あるいは文学理論についての全般的な研究を、さらには文学を材料としながらその文学の枠をも超えて、西洋の古典古代と日本との比較文化論的な研究を進めたいと考えている。この数年留学生や学類生を対象とした授業で両社会の文学を対比的対等的に扱う機会を得てきたことが、そのような関心を抱く大きな要因となった。その種の研究はとかく恣意的で根拠が薄弱なものになりがちであるが、専門分野の研究で培い得た限りの文献学的方法が生かせればと考えている。

また現在学会で推し進めている古典の重要文献の学術的な翻訳作業にも参加しているが、これも私たちの重要な研究活動、社会的責務の一環であることは言うまでもない。研究活動は当分その二本立てになるが、後者の活動は前者の活動により刺激と統御作用を及ぼしてくれるものと期待している。」

－ 3 －

人と学問とが不即不離の関係にあるとすれば、故永田康昭助教授の場合は、さしずめ「含羞の学究」ということにならうか。近ごろでは珍しくなってしまったインテリ特有の恥じらいを浮かべた表情をもう二度と見られなくなってしまった寂しさは彼を知る誰もが感ずることであろう。自分の業績の一部ですと羞かしげに残っていた論文の数々と翻訳の仕事を我々は読むことはできないものの、予定されていた博士論文や古典の翻訳はどこへ行ってしまったのか。そう問い詰めても、彼はただ黙って微笑み返すだけなのだろう。本当に惜しい人を我々は失ってしまったものだ。哀惜の念を禁じ得ない。今はご冥福を祈るのみである。